

中学校英語教育における基本的指導事項の検討(2)： 後置修飾される名詞句の冠詞¹⁾

高 塚 成 信

ABSTRACT: In this paper an attempt is made to investigate the way the definite and indefinite articles are used in noun phrases which are post-modified by phrases and clauses. This investigation then suggests some guidelines for teaching the articles in those syntactic positions at the junior high school level.

1. はじめに

中島 (1980 : 28-29) は、関係詞節によって後置修飾される名詞句の定冠詞について次のように述べている。

先行詞に定冠詞がついていても、いつもそれが後方照応的な the であるとは限らない。たとえば、

(1) This is the house that Jack built.

という場合を考えてみると、この the house は文脈でわかっている (anaphoric の the) か、眼前に見えている家かであって²⁾、はじめから解っているものである。……(1)の the house はこういう the をもつものであって、関係詞節は制限的³⁾なものではない。……これに対し

(2) The house that Jack built is this.

は(1)の主語と述語名詞を逆にしたものであるが、関係詞節の性質はちがう。(2)は制限的なもので [the △] [Jack built a house] から来ており、the は後方照応的である。

(例文番号は原文のままではない)

ここで問題となるのは、(1)の定冠詞を後方照応的と解釈せず、(2)のそれを後方照応的と解釈する根拠は一体何なのかということである。もう少し一般的に言うならば、句や節によって後置修飾される名詞句に定冠詞が用いられる場合の条件はどのようなものなのかということである。

本論は、そのような疑問に答えることを通して、後置修飾される名詞句の冠詞の用法を探ると同時に、そのような統語的位置にある冠詞をどのように指導すればよいのかを探ろうとする試みである。Keene and Matsunami (1969 : 31) が指摘しているように、英語学習者は、ある名詞に後置修飾語句がつくときとりわけ、冠詞の使い方に困難を感じる場合が多いのである。それは、そのような統語的位置において冠詞の基本的意味及び役割の理解が最も問われるからであろうと思われる。

2. 関係詞節（接触節）によって後置修飾される名詞句の冠詞

先ずここでは、(1)と同様の構文について、他の文法家がどのように記述しているのかを検討する。江川（1961：39-41）は、次の2つの文の相違を以下のように論じている。

(3) a. This is the book that I bought yesterday.

b. This is a book that I bought yesterday.

すなわち、定名詞句をもつ(3a)の場合、話し手と聞き手との間に、話し手が昨日本を買ったことを初めとして本について何らかの了解があることが前提となっており、前方照応的なtheである。これに対して、不定名詞句をもつ(3b)の場合、そのような了解がなく、この文によって聞き手には、初めて、「話し手が昨日本を買ったこと」および「これがその本だ」という二つの新しい情報が伝えられる、としている⁴⁾。ここでも、中島（1980）と同様に、この構文における定冠詞は後方照応的なものと解釈されていない。

また、Keene and Matsunami（1969：34）も、関係代名詞は省略された形ではあるが、全く同じ例文に言及し、それぞれが使われる典型的場面を次のように説明している。すなわち、(3a)は、A：‘I bought a book yesterday.’ B：‘Which one is it?’に続くAの発話で、the bookの定冠詞は既に言及したa bookを受ける前方照応的な定冠詞であるとし、後方照応的解釈を採っていない。これに対して、(3b)は、話し手が自分の持っている本について話をしていて、「これは2年前に買った本で、これは昨日買った本です」と対比して示す場合などに用いられるが、どちらの「本」も特定のものを指しているのではなく、「2年前に買った本」「昨日買った本」の集合の中の不特定の一冊を指していると考えられる。

しかし、(1)の主語・述語を逆転させた(2)の構文における定冠詞の用法を取り立てて論じたものはなく、英語文に見られる「旧情報から新情報へ」という典型的な情報構造を考慮しても、これら2つの構文の違いが定冠詞の用法上の相違をもたらしめているとは考えられない。

そこで問題となるのは、話し手と聞き手との間に先行文脈や場面によって何らかの意味でその名詞の指示物について了解が成立していないと定冠詞は用いられないのか、ということである。言い換えれば、了解なしに定冠詞を用いることによって、聞き手にその定名詞句の「指示物がひとつしかない」(＝唯一物指示)という解釈を迫ることはできないのかということである。Hawkins（1978：17）が述べているように、定冠詞は、話し手と聞き手によって共有された世界に存在するその名詞句が指し得るすべてのものに包括的に(inclusively)言及するものであるのに対して、不定冠詞は、その名詞句によって指し得るものが他に少なくともひとつ存在しているのにそれを排除して(exclusively)、ある不特定のひとつに言及するものである。したがって、不定冠詞がついた名詞句の場合には、「～のひとつ」という解釈が、また、定冠詞のついた名詞が単数の場合には、その名詞が指し示し得るものすべて、すなわち、ひとつだけを指し示すということになるように思われる。以下、定冠詞のこの唯一物指示の用法について考察する。

3. 定冠詞の「唯一物指示」の用法：単数名詞の場合

この問題に関しては、Leech（1983：91-93）の次のような説明が参考になる。すなわち、通常the Xという表現は、聞き手に、話し手がどのXを意味しているのか、先行文脈や場

面から解る場合に使われる。そうでない場合には、聞き手は、話し手が示した名詞の「指示物がひとつしかない」と仮定させるを得なくなる、という。例えば、

- (4) Would you like to see the postcard I got from
Helen last week?

において、聞き手がもし、「話し手が先週 Helen からはがきをもらったこと」を初めとして、その「はがき」のことを全く知らなければ(=the postcard の定冠詞が前方照応や場面指示の用法でないなら)、「話し手が先週 Helen から受け取ったはがきは一通だけだ」と解釈することを迫られるというものである。すなわちこの場合、「はがき」は「私が先週ヘレンからもらった」という後置修飾の関係詞節によって初めて聞き手がその指示物を特定できるものとなっており、その定冠詞の用法は後方照応的と呼ばれるものである。

この考え方を採用すると、「話し手が昨日日本を買った」ことを初めとして、その「本」のことをそれまで全く知らなかった場合、聞き手は、(3a)における定冠詞のついた名詞の指示物(=「どの本なのか」)を、先行文脈や場面から特定することができず、やむなく「話し手が昨日買った本が一冊しかないのだ」という解釈を迫られることになると思われる。聞き手の単数定名詞句の処理プロセスを示すと次のようになる。

単数定名詞句→先行文脈や場面にその名詞句の指示物を捜し求める→
見つからない→「指示物がひとつしかない」という解釈を迫られる

この考え方は、Allan (1986:130) によっても支持されている。すなわち、次の文が容認可能なのは、「マックスが知っている医者がかたひとり」の場合に限られるとして、定冠詞に導かれる名詞が単数の場合、その指示物がひとつしかないという解釈を採っている。

- (5) Max says that the doctor he knows squirted his cholera shot
down the sink....

これに対して、安井(編)(1987:394-395)は、次のように述べている。関係詞節の意味内容が、定名詞句の指示物がただひとつであることを直接的・間接的に述べる内容になっているとき、先行詞に定冠詞が生じうる。脈絡もなしにいきなり定名詞句が用いられ、聞き手がその指示物が何であるかをその場で特定できないときでさえも、指示物がただひとつしか存在しないことが意味内容によって保証されていさえすれば、聞き手はそれを実質的には特定したことになるので、定名詞句表現を受け入れることができる。これは、定名詞句の指示物が先行文脈や場面によって特定できない場合、関係詞節の意味内容が指示物がひとつしか存在しないことを保証している必要がある、ということの意味している。

このことは、(3b)の不定名詞句の中の名詞だけを換えた以下の文に対する、英語母国語話者の容認度判定によっても明らかである。

- (3) b. This is a book I bought yesterday.
(6) a.?This is a camera I bought yesterday.
b. This is the camera I bought yesterday.
(7) a.?This is a car I bought yesterday.
b. This is the car I bought yesterday.

- (8) a. ?This is a house I bought yesterday.
 b. This is the house I bought yesterday.

すなわち、「本」は一度に複数冊買うことは十分に有り得るが、「カメラ」「車」「家」と高価になればなるほど一度に複数個買うことは通常考えられない (unlikely) ので、「私が昨日買った」という関係詞節の意味内容が先行名詞の指示物がひとつしかないことを示唆するものになっており、定冠詞の使用が必要になると判断されたものと思われる。

しかし、関係詞節の意味内容が先行名詞の指示物の唯一性を保証するものでないと、何の前提もなしには定冠詞が使えないとするこのような考え方に立てば、後方照応的と解釈できる定名詞句の定冠詞は非常に少なくなるが、実はこのことが江川 (1961: 41-42) 他が (3a) の定冠詞を後方照応的と解釈しない原因になっていると思われる。すなわち、「私が昨日買った」という関係詞節は、一度に本を複数冊買うことは十分有り得るので、意味内容的に (私が昨日買った) 「本」が一冊であることを保証していないが、(9) (10) では、「この本を書いた」という関係詞節が (この本を書いた) 「人」が共著でない限り一人であることを、また、「彼が生まれた」という関係詞節が (彼が生まれた) 「場所」がひとつであることを、保証しているために定名詞句が用いられ、定冠詞は先行文脈や場面を必要としない後方照応的な用法であると解釈されている、と考えることが自然である。

- (9) I met the man who wrote this book.
 (10) This is the place where he was born.

同様に、中島 (1980: 26-27) によって示された (11a) では、「30階建てのアパート」は幾つもあると考えられるので、関係詞節は意味的に先行名詞「アパート」を限定はしているものの特定するものではなく不定冠詞になっているのに対して⁹⁾、(11b) では、ひとりの人が複数のアパートに住んでいるということは通常考えられないので、「彼が住んでいる」という関係詞節は意味的に「アパート」の指示物を十分に限定かつ特定しているために定冠詞が使用されている、と考えることができる。

- (11) a. He lives in an apartment house which is thirty stories high.
 b. The apartment house he lives in is thirty stories high.

しかしこのような考え方では、先行文脈や場面なしに使用される (4) や (5) の定冠詞の用法を説明することはできない。したがって、定冠詞は通常、先行文脈や場面の中で指示物が特定できる場合に用いられるものの、先行文脈や場面なしに使用された場合には、関係詞節の意味内容が先行名詞の指示物がひとつであることを保証しているかしていないかに関わらず、話し手と聞き手が共有する世界の中に「指示物がひとつしかない」という解釈が行われる、と考える必要がある。

事実、Close (1975: 133-134) は、次の (12a) (13a) (14a) における定冠詞は後方照応的であり、話し手が定冠詞に続く名詞句で示されるものがひとつしかないことを仮定しているのに対して、(12b) (13b) (14b) のように不定冠詞がくると「~のひとつ」ということを意味する、とはっきり述べている。

- (12) a. My office is the room on your right.
 b. My office is a room on your right.

- (13) a. The light is on in the dining-room.
b. A light is on in the dining-room.
(14) a. The coat you gave me isn't mine after all.
b. A coat you gave me isn't mine after all.

また、ワトキンス (1987:104) は、

- (15) *This is the situation he hasn't met before.

を非文とし、「彼がそれまで出会ったことのない」「状況」というのはひとつではなくたくさんあるはずであるから、the situation ではなく a situation としなければならないと述べている。同様に、

- (16) *Chicago is the city where you can easily get lost.

という文も、「道に迷い易い都市がシカゴだけだとすれば、the をつけて「唯一の」という意味を表すようにすることは可能だが、常識的には「数ある迷い易い都市のひとつ」と考えるのが妥当である」と述べ、the city ではなく a city とする必要があるとしている。

以上の考察から、先行文脈や場面なしで単数名詞に定冠詞が用いられる場合、話し手は「後置修飾される名詞句の指示物がひとつしか存在しない」と仮定しているし、聴き手は、話し手がそのように仮定していると解釈せざるを得ない、と言える。したがって、(1) (3a) の定冠詞を、先行文脈や場面による支えがない場合、後方照応的用法であると解釈することが可能であると結論することができる。

4. 制限用法と非制限用法の関係詞：先行名詞句の指示物

既に指摘したように、定冠詞は、その名詞が指し示し得るもの全てに包括的に言及するものであるのに対して、不定冠詞は、その名詞が指し示し得る複数のものから不特定のひとつを取り出して言及するものであった (Hawkins 1978:17)。このことと関係詞の制限用法・非制限用法との関係を次に検討する。中学校で扱われるのは制限用法の関係詞のみであるが、制限用法と非制限用法との対比によって、先行名詞句の冠詞とその指示物との関係がより明確になると考えられるからである。

- (17) a. The travellers who knew about the floods took another road.
b. The travellers, who knew about the floods, took another road.

Thomson and Martinet (1986:89) によると、(17a) では、「洪水のことを知っていた旅人はひとり残らず全員別の道を行った」が「洪水のことを知らず、冠水した道を行った旅人」が存在したことが含意されているのに対して、(17b) は、いま話題になっている全ての旅人が洪水のことを知っていたことになるという⁶⁾。(17a) の定冠詞は、後方照応的であり、(17b) の定冠詞は、前方照応的あるいは場面指示的であると考えられる。すなわち、非制限用法の関係詞は、先行文脈や場面によって既に話し手と聴き手に了解されている名詞の後に置かれる (Thomson and Martinet 1986:85)。言い換えれば、非制限用法の関係詞の先行詞は、通常、定名詞句である。

(17a)

洪水のこと を知ってい た旅人	知らな かった 旅人
-----------------------	------------------

話題になっ
ている旅人

(17b)

洪水のことを 知っていた旅人

話題になっている旅人

すなわち、制限用法の関係詞節を伴う定名詞句は、関係詞節が規定する条件に合う名詞の指示物全てに言及するものであるが、関係詞節が規定する条件に合わない名詞の指示物の存在が含意されている。

同様のことが次の文についても言える。

- (18) a. The wine which was in the cellar was ruined.
b. The wine, which was in the cellar, was ruined.

すなわち、(18a) は、「地下室に置いてあったワインは全部駄目になった」が「地下室以外に置いてあったワインが存在しそれは無事だった」ことを含意するのに対して、(18b) では、「話題になっているワインがすべて地下室に置いてあり、それが全部駄目になった」ことを意味する。

このことを、先の

- (3) b. This is the book I bought yesterday.

に当てはめて考えてみると、制限用法の関係詞節を伴う定名詞句 the book は、「昨日買った本のすべて(＝一冊)」を意味すると同時に、関係詞節が規定する条件に合わない「昨日買わなかった本」や「昨日以外に買った本」が存在することを含意しており、「昨日買った本」が他にもあることを含意する不定名詞句 a book の場合と対立する、と思われる。

次に、不定名詞句と制限・非制限用法の関係詞節との関連をみると、次のようなことが解る。⁷⁾

- (19) a. Mike has a son who lives in Tokyo.
b. Mike has a son, who lives in Tokyo.

すなわち、(19a) は、「マイクには東京以外に住んでいる息子あるいは子どもが少なくともひとりはある」ことが普通は含意される。しかし、マイクの息子の数に焦点が置かれていないときには、息子がひとりしかいなくてもこのように言える。逆に、(19b) では、「息子はひとりしかいない」、というのが最も普通の解釈である。しかし、例えば、誰かが東京に引越しをするのに手伝ってくれる人を捜している様な状況で、話し手が「そうそうマイクには息子がいて、(丁度)東京に住んでいる」と言うような場合のように、マイクに息子が何人いるか焦点になっていない場合には、たとえマイクに複数の息子がいても(19b) のように言うことができる。それは、I have a pen. という文においては、何を持っているのかというカテゴリーが問題にされているのであって、持っているペンの数は

問題にされていない (Keene and Matsunami 1969 : 26) のと同じである。⁸⁾

同様に、

(3) a. This is a book I bought yesterday.

は、本の冊数に焦点がない場合 (例えば、This や yesterday に強勢を置いて、「あれではなくこれが」あるいは「2年前ではなく昨日買った」という対比に焦点が置かれている場合) には、昨日買った本がたとえ一冊でもこのように言える。もっとも、(3a) の第一の解釈が「昨日買った複数冊の中の一冊」であるということには変わりはない。しかし、次の文では、車の台数に焦点がない場合でも、昨日買った車が一台の時には、既に指摘したように、不定冠詞 (7a) より、定冠詞 (7b) の方が好まれる。

(7) a. ?This is a car I bought yesterday.

b. This is the car I bought yesterday.

これは、一度に車を複数台買うことは普通なく (unlikely), 車の台数に焦点がない場合でも「一台」ということが明白なので、定冠詞がより好んで選択されると考えられる。同様に、ひとりの人が複数のアパートに住んでいることは通常考えられないから、(20a) の容認度は低く、(20b) が適切であるとされる。複数のアパートに滞在していることを示したければ、(20c) のように、one of~という形式を使う必要がある。このことから、ここでも、「ひとつ」ということが明白なので、定冠詞が選択されている、と考えることができる。

(20) a. ?This is an apartment house he lives in.

b. This is the apartment house he lives in.

c. This is one of the apartment houses he stays at.

これに対して、(3a) では、本を一度に複数冊買うことは十分に有り得るので、「一冊」ということが明白ではなく、冊数に焦点がないときには、「一冊」でも不定冠詞が使われることがある、と考えることができる。

次に、複数名詞を含む不定名詞句と制限用法・非制限用法の関係詞節との関係を検討する。まず、制限用法の場合、関係詞の先行詞中の定冠詞 (=定名詞句) はその名詞句で指し示されるもの全てに包括的に言及するものであるから、不定名詞句はその名詞句で指し示されるものの一部に言及するものであろうという予測が成り立つ。しかし、実際には、次のようなことが明らかになった。すなわち、

(17) c. Travellers who knew about the floods took another road.

は、「洪水のことを知っていた旅人の一部が別の道を行った」ということを意味するのではなく、(17a) 同様に、「洪水のことを知っていた旅人全員が別の道を行った」ということを通常意味する。「一部が」ということを意味したければ、次のように言う必要がある。

(17) d. Some of the travellers who knew about the floods took another road.

また、つぎの二つの文はかなり異なった意味を表している。

- (21) a. ?I like people I work with.
b. I like the people I work with.

すなわち、(21b) が「話し手が現在一緒に仕事をしている人達が好きだ」ということを意味するのに対して、(21a) は「現在の同僚の一部が好きだ」という意味ではなく「話し手の現在の同僚だけでなく、これから一緒に働くことになるであろう同僚も含めて、自分と一緒に働く人達みんな好きだ」という非常に一般的な、通常そんなことは有り得ない、あるいは、少なくとも明言はできない内容を伝えるものになっているために容認度は低い。それに対して、

- (21) c. I like working with people who are lively.

では、「快活な人々」というのは「人々」の部分集合ではあるが、それでもなお不特定性を保っているために不定名詞句が用いられている。同様に、

- (22) Singapore is a good place for people who are interested in sports.

では、「スポーツに興味を持つ人であれば誰でも」ということを意味するのであって、スポーツに興味を持つ人の中の特定の人を意味しているのではなく、スポーツに興味を持つ不特定の人を指している。ここでも、不定名詞句は、「～の一部」を意味するのではなく、「不定性」「普遍性」を強く意味するものとなっている。

これらの分析から明らかのように、名詞句における定冠詞の有無は、特定性・不特定性を第一に示すのであって、唯一性／全部性・部分性の意味はそこから派生する第二義的なものであると言える。

また、複数名詞を含む不定名詞句と非制限用法の関係詞節との関係を見ると、次の例(ワトキンス 1987: 137)からも解るように、関係詞節が先行不定名詞句の指示物全てに一般的に当てはまる内容を記述している場合、制限用法は不適切である。

- (23) a. *Even people in rural areas usually have access to transistor radios which are the most important means of getting news.
b. Even people in rural areas usually have access to transistor radios, which are the most important means of getting news.

制限用法にすると、「情報を得るための最も重要な手段」とならない「ラジオ」が存在することが示唆されてしまい、不適切と判断されるわけである。

5. 関係詞節以外の語句によって後置修飾される名詞句の冠詞

以上、関係詞節によって後置修飾される名詞句の冠詞の用法を検討したが、現在分詞句、過去分詞句、前置詞句によって後置修飾される名詞句の冠詞についても同じことが言える。

先ず、of 前置詞句によって後置修飾される名詞句の冠詞を取り上げる。例えば、

(24) He is the captain of the team.

では、通常一チームにはひとりのキャプテンしかいないことが一般知識としてあるので、of 前置詞句が十分に captain を限定かつ特定しているが、a member of this team では、一チームには複数のメンバーがいるという一般知識によって of 前置詞句が member を限定はするが特定するものとはなっていない。次の例でも、ひとりの男に（一夫多妻制社会以外では）妻はひとり、家庭には父親はひとり、という一般知識が wife, father の前の定冠詞の使用を支えている。

(25) a. *Mary is a wife of Mr. Smith.

(cf. Mary is a good/bad wife.)

b. Mary is the wife of Mr. Smith. (ミルワード 1980 : 15)

(26) the father of a family

また、次の例でも、後続の前置詞句による固有名詞や不可算名詞の限定が定冠詞の使用を支えている。

(27) the London of the 1890s

(28) She hates the dishonesty of the man.

(29) I like the music of Bach and Mozart.

ワトキンス (1987 : 96) によると、of は in など他の前置詞に比べて限定力が強く、したがって、先行名詞句に定冠詞を要求することが多い。

(30) a. *People of California have a high standard of living.

b. The people of California have a high standard of living.

c. People in California have a high standard of living.

(31) In 1886, on the 100th anniversary of American independence, the people of France gave the Statue of Liberty to the people of the United States.

また、現在分詞や過去分詞によって導かれる後置修飾語句が来る場合の先行名詞句の冠詞についても同じことが言える。

(32) a. Different languages are spoken by the people living in these buildings.

b. Singapore is a good place for people interested in sports.

すなわち、(32a) では、living 以下の現在分詞句が people の指示物を特定しているので定冠詞が用いられているのに対して、(32b) では、(22) と同様に、interested 以下の過去分詞句が people という語によって指し得るものを限定してはいるが特定していないので、

定名詞句になっている。

6. まとめと英語教育への示唆

以上考察したように、後置修飾される名詞句の冠詞の用法はかなり複雑で、生徒も教師も、どういう場合に後置修飾される名詞句に定冠詞があるいは不定冠詞がくるのかよく理解していないことが多い。例えば、名詞句に関係詞節を初めとする後置修飾語句が見ついたからといって自動的に定冠詞が選択されるわけではないのに、Thomson and Martinet (1986:81) やワトキンス (1987:103) が指摘するように、生徒は誤って「関係詞節の先行詞には、どういう場合でも the がつくと考える傾向」が強い。

また、英語教科書にみられる次のような典型的な後置修飾語句の提示方法は、定冠詞の用法の正しい理解につながるものではないと思われる。

(33) a. I know the girl. She is playing tennis.

b. I know the girl playing tennis.

(Sunshine English Course Book 3, p.27)

(34) a. I'll keep all the letters. You sent them to me.

b. I'll keep all the letters you sent to me.

(Sunshine English Course Book 3, p.50)

すなわち、それぞれのペアーにおいて、(a) (b) の定冠詞の用法が異なっているにも関わらず、(a) を一文で言い表すと (b) になるかのような印象を生徒に与えてしまうことになる。(a) の定冠詞は、前方照応あるいは場面指示の用法で、第2文を待たずに既に話し手と聴き手にとって特定なものとなっているのに対して、(b) の定冠詞は、場面指示の用法の他に、後続の関係詞節によって初めて名詞句の指示物が特定される後方照応指示の用法であり得る。(33a) (34a) と同じ意味を表すには、それぞれ次のように非制限用法の関係詞を使わなければならない。

(33) c. I know the girl, who is playing tennis.

(34) c. I'll keep all the letters, which you sent to me.

定冠詞の適切な使用のためには、定冠詞の次のような核になる意味が学習される必要がある。

話し手と聴き手によって共有された言語的・非言語的コンテキストの中で、名詞の指示物を聴き手が特定できる、と話し手が思っている

後置修飾語句は、常に、前の名詞句によって指し示され得るものの範囲を限定する役割を果たすが、聴き手がその指示物を特定することを必ずしも可能にするわけではない。名詞の指示物を聴き手が特定できないと話し手が考えたときには定冠詞は選択されない。

後置修飾される名詞句に定冠詞がくる、すなわち、名詞の指示物を聴き手が特定できるのは、次の3つの場合である。

① 先行文脈・場面によって名詞の指示物が特定できる場合

(後置修飾語句がなくても定冠詞が選択される)

- ② 論理的・常識的に名詞の指示物がひとつに特定できる場合
(不定冠詞は選択されない, 例えば, (9)(10)(11b) など)
- ③ 名詞の指示物がひとつしかないと解釈することで特定できたことにする場合
これ以外の場合には, たとえ後置修飾語句によって先行名詞の指し示し得るものが限定されていても不定冠詞が選択される。

すなわち, 後置修飾される名詞句に不定冠詞がくるのは次のような場合である。

- ① 後置修飾語句によって限定された名詞の指示物が, 話し手と聴き手によって共有された場面の中に, 複数存在していて, そのひとつという意味を表す場合
- ② 後置修飾語句によって限定された名詞の指示物が, 話し手と聴き手によって共有された場面の中に, ひとつしか存在しない時でも, 「数」に焦点が置かれず, 名詞の指示物の「カテゴリー」などに焦点が置かれる場合, 例えば,

(35) Jane met a lady who was looking for the station.

では, 「どんな女性に会ったのか」という, 女性の「カテゴリー」に焦点が置かれていて, 「その駅を捜している」女性が複数いたかひとりであったのかは, 問題にされていない。

(ただし, 「数」に焦点がない場合でも, 通常ひとつしかないことが明白な文脈では, 不定冠詞を用いると容認度が下がる。例えば, (8a) ? This is a house I bought yesterday.)

このように, どのような場合に後置修飾語句を伴う名詞句に定冠詞あるいは不定冠詞がくるのかを, 豊富な言語データを提示することによって, 生徒にしっかりと実感させることを指導の目標としなければならない。

【注】

- 1) 本論は, 大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部第14回例会 (1989.3.11 ノートルダム清心女子大学) において口頭発表したものの一部に, 修正・加筆したものである。
- 2) 地図の敷地番号などを指さしながら「これは, ジャックが建てたその(目の前に見えている)家です」というような場合がこれにあたる。
- 3) 「制限的」とは, ここでは後続の関係詞節によって初めて先行名詞句の指示物が特定できるものになっている場合 (=名詞句の定冠詞が後方照応的) の関係詞節のことを指しており, いわゆる「制限用法・非制限用法」という二分法での制限用法の一部を指す用語である。
- 4) これは, 福地 (1985:209-210) の考え方と符合する。すなわち, 関係詞節が後置修飾する名詞句が, 定名詞句の場合, 関係詞節は前提 (旧情報) を伝え主節だけが「断定」機能 (新情報) を担うのに対して, 不定名詞句の場合には, 関係詞節, 主節ともに新情報を担う。
- 5) 10階建て, 20階建て, 30階建ての3つのアパートが既に話題になっていてその中の30階建てのアパートというのであれば, the apartment house which is thirty stories high というような定名詞句が用いられる。
- 6) このことは, 定冠詞ではなく人称代名詞のついた名詞についても言える。
 - a. ?I'm looking for my wallet I lost around here.

b. I'm looking for my wallet, which I lost around here.

すなわち、ワトキンス (1987:140) によると、複数の財布を持っているのでもない限り、(a) はおかしく、(b) のように非制限用法にする必要性がある。

- 7) 非制限用法の関係詞が不定名詞句をその先行詞とする場合には、名詞句が数量を表す語を含んでいるか、関係詞節が many/much/some/none/one of which/whom などの構造をしていることが多い。

The coat has two pockets, one of which contains a wallet.

- 8) 次の文でも、通常「妻」「恋人」は一人であるから、数に焦点が置かれているとは考えられない。どのような「妻」「恋人」というカテゴリーが問題にされていると考えられる。

Mike has a wife he loves very much.

Mike has a girlfriend he loves very much.

【謝辞】

本論の作成にあたり、あらゆる協力を惜しまれなかった同僚のマイケル・クリフトホーン先生に、心から感謝の意を表します。

【参考文献】

- Allan, K. (1986) *Linguistic Meaning Volume 2*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Burt, M. and C. Kiparsky (1972) *The Gooficon: A Repair Manual for English*.
Rowley, Mass.: Newbury House Publishers, Inc.
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983) *The Grammar Book*. Rowley, Mass.:
Newbury House Publishers, Inc.
- Cole, P. (ed.) (1978) *Pragmatics*. (Syntax and Semantics Vol. 9) New York: Academic Press.
- Donnellan, K.S. (1978) 'Speaker Reference, Descriptions and Anaphora' in Cole, P. (ed.)
(1978: 47-68).
- 江川泰一郎 (1961) 【冠詞・形容詞・副詞の用法】(教室英文法シリーズ2) 研究社。
- 福地 肇 (1985) 【談話の構造】 大修館書店。
- Givón, T. (1978) 'Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology' in Cole, P. (ed.)
(1978: 69-112).
- Hawkins, J. A. (1978) *Definiteness and Indefiniteness*. London: Croom Helm.
- Heaton, J. B. and N. D. Turton (1987) *Longman Dictionary of Common Errors*. London:
Longman.
- Huebner, T. (1983) *A Longitudinal Analysis of the Acquisition of English*. Ann Arbor,
Michigan: Karoma Press.
- ミルワード, P. (1980) 【英語の語法診断—日本人の英語の誤り】 南雲堂。
- Murphy, R. (1985) *English Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, R. (1989) *Grammar in Use: Reference and Practice for Intermediate Students of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

中学校英語教育における基本的指導事項の検討(2)：後置修飾される名詞句の冠詞

- 中島文雄 (1980) 『英語の構造 上』 岩波新書。
- Parrish, B. (1987) 'A New Look at Methodologies in the Study of Article Acquisition for Learners of ESL' *LL* 37, 3, 361-383.
- ピーターセン, M. (1988) 『日本人の英語』 岩波新書。
- Pica, T. (1983) 'The Article in American English: What the Textbooks Don't Tell Us' Wolfson, N. and E. Judo (eds.) (1983 : 222-233).
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Tarone, E. and B. Parrish (1988) 'Task-Related Variation in Interlanguage: The Case of Articles' *LL* 38, 1, 21-44.
- ワトキンス, G. (1987) 『英誤を診る』 進学研究社。
- ウェブ, J. (1987) 『日本人に共通する英語のミス 1 2 1』 ジャパンタイムズ。
- Wolfson, N. and E. Judo (eds.) (1983) *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley, Mass. : Newbury House Publishers, Inc.
- 安井 稔 (編) (1987) 『例解現代英文法事典』 大修館書店。
- 山田 純 (1981) 「冠詞指導法の開発ークローズ法適用とその発展的課題」『英語展望』 73, 6-10.

(平成元年11月 8 日受理)